スクールカウンセリングの創造(4)

――学生ボランティアの活用について――

*佐　藤　　静・**川　村　水脈子

On Creating School Counseling (4) : Research on student volunteers

SATO Shizuka and KAWAMURA Minako

Abstract

The purpose of this study was to clarify the state of student volunteer support work for non-attending pupils at school. We executed the questionnaire survey with thirty six guidance staff and interviewed seven guidance staff in seven adjustment guidance classes in Sendai City. The following were clarified. Guidance staff were generally satisfied with the student volunteer's support work. The student volunteer's familiarity, usefulness as an assistant, and the load of coaching influenced an evaluation of them. Guidance staff expected the student volunteer to work continuously and regularly. It was necessary to improve the staff's and student volunteer's prior arrangement systems.

Key words : Adjustment guidance class（適応指導教室）
Non-attendance at school（不登校）
School counseling（スクールカウンセリング）
Student（学生）
Volunteer（ボランティア）

1．問題と目的

文部科学省は平成７（1995）年から臨床心理士らを任用したスクールカウンセラー活用事業を展開してきた．文部科学省(2005ａ)の報告によれば，平成16(2004)年度のスクールカウンセラー派遣校数は8,485校であり，平成７（1995）年に154校からスタートした活用事業は，当初の目標であった全国約一万校に及ぶ中学校への全校配置に近い水準にまで整備されてきていることがわかる．それに応じて，予算額も当初の３億円から42億円まで増加している．スクールカウンセラー活用事業と並行して，心の教室相談員等のスクールカウンセリング関連の諸制度の整備も行われてきた．そうした取り組みによって，わが国の小・中学校の不登校児童生徒数は平成13（2001）年度の138,722人をピークとして，平成14（2002）年度以降は毎年減少傾向が続き，平成16（2004）年度には123,317人（速報値）まで減少している（文部科学省，2005b）．しかし，全児童生徒数に対する不登校児童生徒数の割合はほぼ横這い状態で推移している．特に中学校では，平成14（2002）年度から平成16（2004）年度の３年間にかけて，いずれも2.73％の同率を示しており，変化が認められない

＊　教育臨床総合研究センター
＊＊　仙台市教育局適応指導センター

状態が続いている．

こうした状況から，わが国の不登校をめぐる状況は新たな局面を迎えていることが予想される．すなわち，長年にわたって続いていた不登校の急増に歯止めはかかったが，不登校児童生徒数の割合は高いレベルを維持したまま，一種の平衡状態を示してゆく可能性が考えられる．今後も不登校児童生徒数の推移を見守る必要があるが，教育現場における実際の取り組みにあたっては，個々の児童生徒の多様な成長・発達過程に応じたサポートの方法や場を工夫し，整備してゆくことが課題になってくると考えられる．スクールカウンセリングは，そうした時代的変化の局面に対処し続けることを求められる創造的事業と位置づけることができる．佐藤（2001，2002，2003）は，そうした性格をもつスクールカウンセリングの関連諸事業について，国や地方（宮城県・仙台市）の取り組みの過程を追いながら，その実態を分析・報告してきた．今回報告する学生ボランティアの活用も，そうした取り組みの中で導入された積極的な工夫の一つであり，教育現場に定着し，成果をあげつつある．

今回の報告の目的は，不登校児童生徒を対象とした適応指導の現場で学生ボランティアがどのように受け入れられ，評価されているかを明らかにして，学生ボランティアの役割や機能について検討することである．そのため，仙台市教育局の適応指導センター（児遊の杜）と適応指導教室（杜のひろば）における学生ボランティア活用事業を参照事例としてとりあげて，学生ボランティアの受け入れの成果と課題について分析を行う．この調査は学生ボランティアが導入された比較的早い時期に行ったので，学生ボランティア活用の初期の実態を明らかにすることができると期待される．

本論では，最初に仙台市の教育現場における学生ボランティアの活用事業の概要を述べる．次に仙台市適応指導センターと適応指導教室の教育相談員を対象に実施した質問紙調査とインタビュー調査の結果を報告して，学生ボランティアの活用に関する考察を行う．

2．仙台市の学生ボランティア活用事業

2.1　学校支援ボランティア

近年，地域支援活動としてのボランティアの機運が全国的に高まり，国や地方自治体，企業等によるボランティア活動への支援も盛んになってきている．学校を「協働の広場」と位置づけたボランティア活動も重要な取り組みのひとつであり（三井情報開発株式会社総合研究所，2004），学校支援ボランティアとして市民ボランティアや学生ボランティアが活用される機会が増えている．活動内容も教科指導や課外活動の補助，生活指導の補助など広範囲にわたっており，不登校支援の取り組みにおいても，学生ボランティアの活用が図られるようになってきた．

仙台市教育委員会は，平成13（2001）年1月に「仙台まなびの杜21－仙台市教育ビジョン」を策定・議決した．その中の重点方針の一つに「パートナーシップ」を掲げて，児童生徒の教育を家庭や市民，団体，企業や行政などの地域の人材とともに行うことをうたっている（仙台市教育委員会，2002）．その方針の下，平成13（2001）年度に仙台市教育委員会は宮城教育大学と連携協力の覚書を締結した．それ以降も，地元大学の東北福祉大学，東北学院大学，仙台大学と覚書を締結し，平成16（2004）年には東北大学教育学部と学生ボランティア派遣に関する協定書を取り交わした（仙台市教育委員会，2004）．実際の取り組みとして，仙台市立学校の要請に応じて，連携協力先の大学生が「学生サポートスタッフ」として学校に赴き，学習指導の補助や校外学習の付き添い，学校行事や部活動の指導の補助等のボランティア活動を行っている．従来，学生ボランティアによる学校支援活動の多くは，学生個人や大学教員の個別のルートを通して行われていた実情がある．それを地域連携における正式な学校支援制度として整備したということになろう．

2.2　適応指導ボランティア事業

仙台市は不登校児童生徒の支援施設として市内6ヶ所の適応指導教室（杜のひろば）とそれらを統括する適応指導センター（児遊の杜）を設置している．適応指導センターでは，平成14（2002）年度から適応指導ボランティアの養成・活用事業を開始した．事業の目的は，適応指導センターと適応指導教室の運営・適応指導の補助としてボランティアを活用し，通級児童生徒の活動の充実を図るものである（仙台市適応指導センター，2005）．ボランティアの募集は一般市民を対象としており，大学生に限定されたものではない．ボラ

表1　仙台市適応指導センター・適応指導教室におけるボランティアの活動状況

	平成14年度	平成15年度	平成16年度
養成講座受講者人数	88人	67人	95人
ボランティア活動人数	−	35人	56人
ボランティア活動回数	−	242回	434回

※平成17年度版「児遊の杜 事業概要」のデータを基に作成した.

ンティア養成講座の受講者に占める大学生及び大学院生の割合をみると，平成14（2002）年度が90％，平成15（2003）年度が100％，平成16（2004）年度が74％であった．平成16（2004）年度に学生の割合が減ったのは，一般市民を構成員とする不登校支援ネットワークの活動が始まり，その構成員が合流したためである．それでも学生ボランティアが7割以上を占めており，適応指導ボランティアの中心になっていることがわかる．

仙台市適応指導ボランティアの参加資格は，①各大学の教授等の推薦を受けた者，②臨床心理士や教員を目指している者，③適応指導ボランティア養成講座を修了した者，④適応指導教室の運営方針を理解し不登校状態にある児童生徒の心理に沿った言動ができる者，とされている（仙台市適応指導センター，2005）．実際には，仙台市適応指導センターで開催される適応指導ボランティア養成講座を受講して，不登校やボランティアについて学んでからボランティア活動を行う者が多い．委嘱されたボランティアは仙台市適応指導センターや市内に6箇所ある適応指導教室で活動することになる．

適応指導ボランティアの活動内容は，学習タイムの指導補助，スポーツやゲームなどのリクリエーション活動の指導補助，自由時間における遊びの相手などである．表1に平成14（2002）年以降の仙台市適応指導センターと適応指導教室におけるボランティアの活動状況を示した．

3．調　査

3.1　目的と方法

仙台市適応指導センターと6つの適応指導教室の学生ボランティア活用の状況を明らかにするため，それらの施設で指導を行っている教育相談員を対象とした質問紙調査とインタビュー調査を実施した．

質問紙の内容は，教育相談員の基礎属性と，学生ボランティアに対する印象や意見に関する50項目の質問（回答は5件法による）で構成した（川村，2003）．本報告では，それらの質問項目の中から学生ボランティアの成果と要検討・改善点に関する主要な18項目を抽出して分析した．インタビューの内容は，質問紙調査の内容を深めることを目的として，学生ボランティアを受け入れた成果や改善点について質問した．

3.2　調査対象者

質問紙調査の対象者は適応指導センターと各適応指導教室の教育相談員（計37人）であり，36人（男14人，女22人）から回答を得た．年齢の内訳は，20歳代16人（44.4％），30歳代6人（16.1％），40歳代4人（11.1％），50歳代3人（8.3％），60歳代7人（19.4％）であった．適応指導スタッフとしての経験年数は，1年未満の者10人（27.8％），1～3年の者19人（52.8％），4～6年の者6人（16.7％），7～10年の者1人（2.8％）であった．学生ボランティアと仕事をした経験については，1回もない者6人（16.7％），1～3回程度の者9人（25.0％），4～10回程度の者11人（30.6％），11回以上の者10人（27.8％）であった．学生ボランティアと仕事をした経験に関連する質問項目については，1回も経験がない者6人を除いた30人の回答を用いて結果を処理した．

インタビュー調査の対象者は各施設1人，合計7人（男3人，女4人）であった．インタビュー調査の対象者の選出は各施設に依頼した．学生ボランティアと活動した経験回数の内訳は，9回以下が2人，10回以上が4人，30回以上が1人であった．

3.3　調査の実施方法

質問紙調査は2003年6月から7月にかけて，質問紙を各施設に配布して数週間後に回収する方法で実施した．インタビュー調査は，同年7月下旬から8月にか

けて，各施設を訪問して，個別場面で対象者に聞き取りを行った．

4．結　果

4.1　質問紙調査の結果

主要な質問項目の回答結果を表2に示した．「学生ボランティアの働きに満足している」は，教育相談員側からみた学生ボランティア活用事業の成果を直接的に反映する質問項目である．「生徒は学生が来ることを楽しみにしている」，「学生ボランティアはスタッフの人手不足の解消に役立っている」，「学生ボランティアへの対応や配慮に負担を感じる」，「学生ボランティアと情報交換をする時間がない」，「学生ボランティアは生徒の関心や興味の幅を広げてくれる」，及び「相談員と学生ボランティアでは生徒の対応や態度に違いがある」は，次項で報告した主成分分析によって得られた6つの主成分において，それぞれ最も大きな因子負荷量をもつ代表的な質問項目である．

質問紙の17個の質問項目について，Kaiser の正規化

表2　主要な質問項目に対する回答者の割合（%）

質　問　項　目	1	2	3	4	5
学生Vの働きに満足している	13.3	56.7	23.3	6.7	0.0
生徒は学生が来ることを楽しみにしている	13.3	40.0	43.3	0.0	3.3
学生Vはスタッフの人手不足の解消に役立っている	10.0	56.7	16.7	10.0	6.7
学生Vへの対応や配慮に負担を感じる	3.3	10.0	36.7	46.7	3.3
学生Vと情報交換をする時間がない	20.0	33.3	26.7	20.0	0.0
学生Vは生徒の関心や興味の幅を広げてくれる	3.3	40.0	43.3	10.0	3.3
相談員と学生Vでは生徒の対応や態度に違いがある	0.0	60.0	36.7	3.3	0.0

Note：1＝とても当てはまる，2＝ある程度当てはまる，3＝どちらともいえない，4＝あまり当てはまらない，
5＝まったく当てはまらない；　表中の「V」は「ボランティア」の意味

表3　学生ボランティアに関する教育相談員の評価の主成分分析結果

	PRIN.1	PRIN.2	PRIN.3	PRIN.4	PRIN.5	PRIN.6	共通性
生徒は学生が来ることを楽しみにしている	.875	−.035	−.283	.024	.123	.005	.862
学生Vがいると教室の雰囲気がよくなる	.791	.062	−.078	−.048	.297	.045	.728
生徒は学生に親しみを感じている	.789	.225	−.028	.063	.069	−.020	.683
生徒と学生Vだけで時間を過ごさせても不安はない	.518	.451	−.277	−.093	−.317	−.025	.658
学生Vはスタッフの人手不足解消に役立っている	.085	.844	−.196	−.037	.245	−.010	.820
学生Vに提供する生徒の個人情報は制限した方がよい	−.220	−.810	.226	.237	.087	.165	.847
学生Vには何でも遠慮なく指示できる	−.084	.603	.102	−.206	.504	.256	.742
学生Vは生徒の心理面の援助になる	.351	.465	−.316	−.080	.424	−.373	.765
学生Vへの対応や配慮に負担を感じる	−.163	−.099	.834	.064	−.115	−.039	.751
生徒への対応面で教育相談員の負担が軽くなった	.537	.271	−.630	.115	−.187	.204	.847
学生Vの影響で生徒の生活態度や規律が甘くなる	.017	−.145	.600	.384	−.292	.203	.655
学生Vは生徒との関わり方をもっと勉強してほしい	−.254	−.492	.579	.004	−.081	.038	.649
学生Vと情報交換をする時間がない	.158	−.018	.026	.875	.081	−.125	.814
学生Vとの協力・連携はうまくいった	.101	.214	−.090	−.872	.095	−.056	.837
学生Vは生徒の関心や興味の幅を広げてくれる	.339	.127	−.210	.050	.771	.044	.773
学生Vの考え方ややり方に戸惑うことがある	−.254	−.191	.356	.411	−.426	−.418	.753
教育相談員と学生Vでは生徒の対応や態度に違いがある	.030	−.074	.003	−.042	.057	.914	.847
寄　与　率	18.0	15.6	13.7	11.7	9.6	8.0	

Note：第1主成分＝親和，第2主成分＝補助，第3主成分＝負担，第4主成分＝連携，第5主成分＝刺激，
第6主成分＝差異；　表中の「V」は「ボランティア」の意味．

を伴うバリマックス回転による主成分分析を行ったところ，表3のとおり6つの主成分が得られた．それぞれに含まれる質問項目の内容から，第1主成分は「親和」，第2主成分は「補助」，第3主成分は「負担」，第4主成分は「連携」，第5主成分は「刺激」，第6主成分は「差異」と解釈した．

各主成分の主成分得点を説明変数とし，質問項目「学生ボランティアの働きに満足している」の回答値を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った．その結果を表4に示した（重相関係数 $R=.761$，決定係数 $R^2=.579$．分散分析結果：$F[6,\ 22]=5.034$，$p<.01$）．有意確率が5％以下であった説明変数は第1・第2・第3主成分であった．

さらに，質問項目「学生ボランティアの働きに満足している」の回答値と各主成分得点とのSpearman相関係数を求めたところ，第2主成分得点との相関が有意であった（$r=.465, p<.05$）．その他の相関は有意ではなかった（数値は省略）．

4.2 インタビュー調査の結果

インタビュー調査については，学生ボランティアを受け入れて成果があったと思われた点と，検討・改善すべきと考えた点について，聞き取りの結果を小項目ごとに整理して表5と表6に示した．

表4　各主成分得点を説明変数とした重回帰分析における各係数と有意確率

	非標準化係数		標準化係数		
	B	標準誤差	β	t	有意確率
第1主成分	.233	.109	.296	2.138	.044
第2主成分	.344	.109	.437	3.158	.005
第3主成分	−.297	.109	−.377	−2.726	.012
第4主成分	−.213	.109	−.271	−1.961	.063
第5主成分	.203	.109	.258	1.866	.075
第6主成分	−.103	.109	−.131	−.948	.354
定　数	2.241	.107		20.961	.000

表5　インタビュー調査による「成果と思われる点」

項　目	回　答　内　容
学生の資質	・様々な特技で活動や遊びに対応してくれるので，活動内容が広がる． ・集団遊びの中に一緒に入ってくれると活動がスムーズになることが多い． ・子どもたちの人間関係の幅が広がる． ・指導者や管理者ではない立場なので，子どもたちが構えずに接することができる． ・年齢の近い「お兄さん」や「お姉さん」として，子どもたちが親しみを感じている． ・女性が多い教育相談員に代わって，男子学生がスポーツ活動等にうまく対応してくれる． ・若いので元気がよく，一生懸命さが子どもたちの刺激になる． ・顔見知りの学生が来ると嬉しそうにしていたり，また来て欲しがったりする子がいる． ・学生ボランティアがきてもあまり気にせず，普段どおり生活する子も多い．
指導補助としての資源	・教育相談員の目の届かないところをカバーしてくれる． ・指導の手が足りないときに対応をしてくれる． ・教育相談員ではなかなか関わりがもてないケースに関わってくれることがあった．
指導のモニタリング	・学生ボランティアの関わり方を見て，自分のやり方を省みることができる． ・自分が見えていなかったことを学生ボランティアに教えられたことがある． ・外部者が入ることが，教育相談員にとっても日々の仕事の上で刺激になる．

表6　インタビュー調査による「検討・改善を要すると思われる点」

項　目	回　答　内　容
学生の資質	・子どもと関われない学生や，社会性のない学生がいた． ・服装が派手だったり，携帯電話で話をしたりする学生がいた． ・一生懸命なあまり，子どもとの距離のとり方が近すぎる学生がいた． ・立派な学生だけでない方が，子どもたちは気が楽かもしれない．
活動の継続性	・一回だけの単発で来る学生ボランティアを活用することがむずかしい． ・初めて来た学生ボランティアの場合，どう動いてもらえばよいかわからない． ・単発で参加する学生ボランティアより，継続して定期的に来てもらう方がよい． ・継続して定期的に来てくれると頼める内容が広がる． ・定期的に来てくれると，子どもたちとの人間関係がつくれる．
教育相談員とボランティアの関係	・学生ボランティアに対するこちら（教育相談員）の立場や指示の出し方がわからない． ・学生ボランティアに注意や指導をすることが難しい． ・学生ボランティアに対してこちら（教育相談員）が気を遣ってしまう．
受け入れ体制	・教育相談員と学生ボランティアの打ち合わせの時間がとれなかった． ・わからないことは教育相談員に聞いてほしいが，そういう機会がつくれなかった． ・養成講座での実習場所と，実際の活動の場所が異なったケースがある． ・子どもによっては，学生ボランティアに対する抵抗が大きい場合がある．

5．考　察

5.1　学生ボランティアに対する教育相談員の評価について

ここでとりあげた質問項目は，5.2で報告する主成分分析によって得られた6つの主成分を代表する項目である．質問紙調査の質問項目「学生ボランティアの働きに満足している」に対して教育相談員の70％が「とても」「ある程度」と回答している．逆に，「学生ボランティアへの対応や配慮に負担を感じる」に「とても」「ある程度」と回答したのは13.3％にとどまっている．これらの結果から，教育相談員たちは学生ボランティアに対して概ね肯定的な評価をしており，総体的に学生ボランティア活用が適応指導の現場に受け入れられていることがわかる．また「学生ボランティアはスタッフの人手不足の解消に役立っている」に対して教育相談員の66.7％が「とても」「ある程度」と回答しており，「生徒は学生が来ることを楽しみにしている」に対して教育相談員の53.3％が「とても」「ある程度」と回答している．これらの結果から，学生ボランティアは適応指導の現場で頼りにされ，児童生徒との親和性も高いことが推測される．

「学生ボランティアは生徒の関心や興味の幅を広げてくれる」に教育相談員の43.3％が「とても」「ある程度」と回答しているのに対して，教育相談員の53.3％が「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」と回答している．この結果から，生徒の興味・関心に対する学生ボランティアの刺激には不確実な面があると推測される．また，「相談員と学生ボランティアでは生徒の対応や態度に違いがある」に対して教育相談員の60％が「ある程度」と回答しており，40％の教育相談員が「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」と回答している．この結果から，生徒の態度の違いを感じている教育相談員と，あまり感じていない教育相談員がいることがうかがえる．このことは，個々の教育相談員の年齢や役割の差異を反映していると推測される．

「学生ボランティアと情報交換する時間がない」に対して教育相談員の53.3％が「とても」「ある程度」と回答している．このことから適応指導の現場における情報交換や打ち合わせの時間が確保しにくい状況がうかがわれる．

5.2　学生ボランティアに対する教育相談員の評価要因について

主成分分析で得られた6つの主成分得点を説明変数とし，質問項目「学生ボランティアの働きに満足している」の回答値を従属変数とした重回帰分析で有意であった説明変数は第1主成分（親和）・第2主成分（補助）・第3主成分（負担）であった．この結果から，学生ボランティアに対する教育相談員の満足感には，学生ボランティアが適応指導教室の雰囲気に馴染んで

生徒に受け入れられているかどうか，教育相談員の補助スタッフとしての有用性，そして学生ボランティアに対する教育相談員の対応の負担の3つの要因が大きく影響していることがわかった．さらに，質問項目「学生ボランティアの働きに満足している」の回答値と第2主成分得点との間に有意な中程度の相関が認められた．このことは評価要因として明らかになった補助スタッフとしての期待感を傍証していると考えられる．

5.3 インタビュー調査から

今回のインタビューの対象者は学生ボランティアの対応にあたった代表格の教育相談員であり，実際の活動で感じた本音の意見を聴取できたと考える．学生ボランティアの受け入れの成果と思われる点は，学生の資質，指導補助としての資源，指導のモニタリング（振り返り）の3つに集約することができた．検討・改善を要すると思われる点は，学生の資質，活動の継続性，教育相談員と学生ボランティアの関係，受け入れ体制の4つに集約することができた．

教育相談員は，学生ボランティアが参加することによって適応指導の活動が活性化されることを評価している．新顔が入ることの新鮮さを教育相談員は歓迎しており，生徒たちも親しみとともにその刺激を受け止めている様子がうかがえる．反面，生徒によっては学生ボランティアに対する抵抗が大きいとの指摘もあり，新鮮な刺激のある環境と，落ち着いた環境の両面を確保するため，活動内容や指導スタッフの顔ぶれによって，参加・不参加を選択できたり，“退避場所”を確保したりするなどの工夫が課題になると考えられる．

学生の資質に関して，社会性や取り組みへの姿勢に問題がある学生がいるとの指摘があった．事前の学習や指導，参加動機に関連する事柄であるが，対応に配慮を要する不登校支援の取り組みにおいては，特に注意すべき点と考えられる．「立派な学生だけでない方が，子どもたちは気が楽かもしれない」との指摘もあった．このことは，様々なタイプの学生に子どもたちが接する意義にも通じると考えられる．子どもたちにとって，年齢の近い学生ボランティアは一種の成長モデルであるから，多様なタイプのモデルに触れてもらうことが重要となる．教員や教育相談員以外の，多様な大人に接する機会を得るためにも，学生ボランティアは有用と考えられる．

教育相談員の目や手の届かないところをカバーしてくれる指導の補助資源として学生ボランティアを評価する指摘があった．適応指導教室の活動内容によっては多くの人手を要する場合があり，学生ボランティアが頼りにされていることがうかがわれる．反面，教育相談員と学生ボランティアの関係をめぐって，指示の出し方や注意の仕方が難しい，わからない，気を遣ってしまうとの指摘もあった．教育相談員と学生ボランティアの打ち合わせの時間や機会がもてないという指摘もあり，学生ボランティアを受け入れる側の準備体制を整えておく必要がある．

学生ボランティアが継続して，定期的に活動に参加してくれることを評価し，それを望む声が多かった．このことは受け入れ側である教育相談員にとっても，生徒にとっても，ともに安定した関係性を維持するために重要な点であると考えられる．学生ボランティア側からも，短期間のボランティア経験では学習の機会を十分に生かせない懸念がある．適応指導のような特に配慮を要するボランティア活動では習熟が要求されるから，定期的・継続的なボランティア体制が課題となる．現実的には，ボランティア活動に熱心に取り組む学生が絞り込まれて，長期にわたるボランティア・スタッフとして定着することになるだろう．そうした学生の受け皿や役割を，受け入れ側があらかじめ想定して，準備しておくことが必要と考えられる．

成果の一つとして，日頃の活動の振り返りの効果が挙げられた．学生ボランティアが適応指導の現場に入ることで，教育相談員が日頃の自分のやり方や適応指導教室の活動を客観的に見直す機会につながるということである．外部者の参加は教育相談員の自己意識や動機づけの高まりを促すと考えられ，学生ボランティアの参加がもたらす副次的効果として重要と考える．

仙台市の適応指導の場の特性として，6つの適応指導教室（杜のひろば）は小集団に参加できる児童生徒を対象としており，適応指導センター（児遊の杜）は個別対応を要する児童生徒を対象としている．個別対応を要する場での学生ボランティアの活動には限界があり，導入にあたっては活動の場の特性を考慮する必要がある．

5.4　総合的考察

不登校児童生徒を対象とする仙台市の適応指導施設の教育相談員に対する今回の質問紙調査とインタビュー調査から明らかになったことは，次のとおりであった．概ね教育相談員は学生ボランティアの活動を肯定的に評価している．特に，学生ボランティアが児童生徒や施設に馴染んでいるかどうか，教育相談員の補助として有用かどうか，学生対応に伴う負担の３つの要因が評価に大きく影響している．学生ボランティアがもたらす新鮮な刺激を教育相談員は歓迎しており，学生の参加が普段の適応指導の振り返りにもつながっている．教育相談員は学生ボランティアの定期的・継続的な活動を望んでおり，受け入れに際して打ち合わせの時間の確保が課題となっている．

以上の知見は，仙台市の適応指導の現場にボランティアが導入されて二年目にあたる比較的初期における調査に基づいたものである．その意味で，学生ボランティアの受け入れにあたっては，施設側にもまだ慣れていない状況があったと考えられる．学生ボランティアの活用にあたっては，受け入れのための準備や体制が十分に整わない状況で事業が始まった感がある．現場には戸惑いの声も聞かれたが，全体として十分な手ごたえや成果があり，学生ボランティアの活用は回数を重ねるごとに現場に定着し，活動体制も整備されてきている．

学生ボランティアの活用は，今後さらに学校運営や学校適応支援を支える重要な取り組みの一つとなってゆくと予想される．また，教員養成課程に学ぶ学生にとって，実際の教育現場での活動体験は，必修となっている通常の教育実習と並んで，大きな教育効果をもたらすと予想される．今後も引き続き，教育現場側と学生側の双方にとってのボランティア活動の効果や課題に関する検討を重ねてゆく必要があると考える．

（文献）

川村水脈子　2003　スクールカウンセリングにおける学生の担う機能と意義，宮城教育大学教育学部生涯教育総合課程・平成15年度卒業論文

三井情報開発株式会社総合研究所　2004　ボランティア活動を推進する社会的機運醸成に関する調査研究報告書，文部科学省

文部科学省　2005ａ　教職員配置等の在り方に関する調査研究協力者会議　第３回配布資料，文部科学省

文部科学省　2005ｂ　学校基本調査速報，文部科学省

佐藤　静　2001　スクールカウンセリングの創造，宮城教育大学紀要，第36巻，289－301

佐藤　静　2002　スクールカウンセリングの創造(2)，宮城教育大学紀要，第37巻，369－384

佐藤　静　2003　スクールカウンセリングの創造(3)：スクールカウンセラー調査と学校調査からの検討，宮城教育大学紀要，第38巻，219－229

仙台市教育委員会　2002　学校教育－推進の指針と指導の重点，仙台市教育委員会

仙台市教育委員会　2004　教育せんだいNo.15，仙台市教育委員会

仙台市適応指導センター　2005　平成17年度版事業概要，仙台市適応指導センター

（謝辞）

本研究を行なうにあたっては，仙台市教育局の適応指導センター（児遊の杜）と適応指導教室（杜のひろば）の皆様の励ましとご協力をいただいた．心より感謝申し上げます．

（平成17年９月30日受理）